

シンポジウム II : 私の研究

1. 司会のことば

松尾 収 二*

3名のシンポジストの研究内容は、後項の個々の論文を読んで頂くこととし、ここでは、司会者が感じたシンポジウム全体の印象とメッセージを伝えることとする。

本シンポジウムは、松下 誠 大会長肝いりの企画であった。学問の府である大学は教育とともに研究も推進していかねばならない。その中で、若い教員の研究は本人の成長につながるだけでなく、他の教員にも元気を与えてくれる。本シンポジウムが開催される前日に松下 大会長は、「臨床検査の現場に還元する研究を目指して」というタイトルでアルカリホスファターゼの研究を中心に大会長講演をされた。先生は、附属病院がなく患者試料が手に入りにくいいため健康者の試料でも研究できるテーマはないかということで知恵を絞られた。臨床検査の現場の疑問・問題を解決することに重きをおき、困難な中でもできるものがあることを示された。一つ一つの積み重ねが結果につながった。このことが大会長の本シンポジウムに寄せる思いを語っている。

3名のシンポジストの発表は、血小板抗原・抗体(松橋美佳先生：埼玉県立大学)、臨床化学領域の測定法の開発(外園栄作先生：九州大学大学院)、そして細菌の薬剤耐性機構(齋藤良一先生：東京医科歯科大学：事情により掲載無し、

本誌第9巻補冊(抄録集)を参照)であったが、研究内容はいずれもすばらしかった。若い先生方故に教育の現場では色々な多くのことをやらなければならないであろうが、その中で時間をみつけて頑張っておられることが十分に伝わった。3先生に共通していたことは、診療の現場、あるいは臨床検査の現場における問題を研究のテーマとされていたことであり、臨床検査に関する研究の幅の広さ、奥深さを味わった。

そして、3名のシンポジストが「私の研究」を始められる際は、“人”あるいは“疑問”と言う出会いがあった。その出会いを受け止められる感受性と実行力が3名の「私の研究」につながったことを感じた。

研究には情熱と根気がある。自分に厳しくなければできない。大学人である以上、研究から逃げることはできない。患者試料の入手の困難さ、実験設備や器具・機械の不足、まわりの理解不足など課題も多々あるだろうが、研究は社会に貢献できるだけでなく己を高めることにつながる。そして、それは直接的間接的に学生の教育につながる。できれば臨床研究が望ましいが、どんなことでも良い。老いも若きも「私の研究」を持ち続けよう。今回のシンポジウムは、若い方々だけでなく、我々年配者をも鼓舞したものであった。

*天理医療大学・天理よろづ相談所病院 shuji-m@tenriyozu-u.ac.jp